

1930s



1950s

北海道大学150年史 編集ニュース

第 10 号 2023年5月20日

目 次

〔巻頭コラム〕

宮部金吾博士の象徴 クロビイタヤ
山本美穂子 …… 2

〔北大歴史ノート 第10話〕

札幌への道（中編） …… 4

〔北大風景グラフX〕

古河講堂 …… 5

〔資料紹介〕 収蔵庫さんぽ …… 6

〔活動紹介〕 日誌 pick up …… 7

〔編集後記等〕 …… 8



2010s

〔巻頭コラム〕

宮部金吾博士の象徴 クロビイタヤ

山本 美穂子

(大学文書館特定専門職)



左図は、クロビイタヤの意匠が施された宮部金吾博士在職25年記念絵葉書(1908年)。中央図・右図は、1884年の植物採集調査旅行の野帳。1884年6月14日、宮部は「イタヤ leaves like カンボク」(中央図)、「クロビイタヤ 弱キ木 枝黒、bark light brown & long, lami narrower」(右図)と鉛筆で書き込んだ。barkは樹皮、lamiは葉身を指す。後に宮部が黒色系のインクで上書きし、赤色系のインクで「Acer miyabei ミヤベイタヤ」と加筆した部分は、現在も鮮明に読み取ることができる。

いまから115年前の1908年、「思へば思ふ程夢の様な気がするのである」*1と、宮部金吾博士(1860-1951)は自らの来し方を振り返り、学生につぶやいた。札幌農学校に第2期生として1877年入学した宮部金吾は、1881年7月卒業後に開拓使・農商務省の御用掛として奉職し、1883年7月母校の助教に任ぜられた。1908年は助教就任から数えて在職25周年にあたり、日本固有種「クロビイタヤ」の樹皮・葉(葉身と葉柄)・種子を意匠した記念絵葉書が制作された。宮部博士の象徴がクロビイタヤ(別名ミヤベイタヤ)となるまでの足跡を、回想と資料からたどることにしよう。

(1) 江戸っ子、北海道に憧れる

1860年4月27日、宮部金吾は江戸の下谷御徒町で幕臣の家に生まれた。探検家の松浦武四郎(1818-1888)と懇意にしていた宮部家には松浦の北海道に関する著作物や書画があり、幼少から「天然特に動植物に関する書籍中の画など非常なインタレストを以て見たので、自然北海道を跋涉して見たい考が盛であつた」*1という。

1874年東京外国語学校英語科(後の東京英語学校)に入学した宮部は、植物への強い関心を抱き続け、湯島聖堂内にあった「書籍館」(1872年文部省開設の図書館)に通っては植物学書を漁り、アメリカの植物分類学者 A.グレイ(A. Gray, 1810-1888)の著書に親しんだ。

(2) 寸暇を惜しんで、植物採集

1877年札幌農学校に転学後、宮部はアメリカ人教師 D.P.ベンハロー(D. P. Penhallow, 1854-1910)から植物学・植物生理学の講義を受け、植物分類(顕花植物、隠花植物)や植物細胞の構造など、植物学の基礎的な事項を学んだ。札幌農学校の書籍庫は、A.グレイやドイツの植物生理学者 J.サックス(J. Sachs, 1832-1897)による教科書的な著書を収蔵していたが、農学・英文学・化学等に比して植物学分野の洋書は少なかった。宮部は、農学校の農場実習(Manual Labor)で得たアルバイト料を、在京の親友 高田早苗(1860-1938)に託して、植物学の書籍の購入・送付金にあてた。



図1 宮部金吾(1877年8月)



図2 受講ノート(1878年)

農学校では、生徒に採集缶・圧搾機・圧搾用紙・標本台紙を貸与して、植物採集と植物標本(腊葉)の作成を奨励した。宮部は「四年間暇さへあると採集に出かけ」、「友人も珍しい草があると僕にくれ卒業の時は札幌附近の植物五六百種も集めた」*1という。講義や書籍で得た知識を活かして、宮部は校舎の周辺や農場のほか、円山・藻岩山や豊平川の河川敷等に出掛けて自生する草木や地衣類を観察・採集し、標本の作成・精査の技術を磨いていった。

(3) イタヤカエデの変種? 新種!

農学校卒業後の宮部は、1881年11月~1883年9月にかけて、東京大学の植物学教室・小石川植物園で研鑽を積み、北海道所産植物の標本調査と植物学研究に邁進した。

1884年6月9日~8月24日には、海岸線に沿って日高・道東地域と南千島(色丹島・択捉島・得撫島)へ植物採集の調査旅行を決行した。農学校の植物園の整備に向けた樹木の種苗・若木・宿根草の採集と、道央地域以外に分布する植物の観察・腊葉用の採集が目的であった。



図3 日高・道東・南千島植物調査行程(1884年)

この旅行中、宮部は「殊に樹木に注意して」*2歩き、野帳を2冊記している。1884年6月14日、静内郡下下方村から新冠牧馬場まで、植物採集をしながら宮部は馬で移動した。その途次、宮部はイタヤを採集して「イタヤ leaves like カンボク」と野帳に記した。野帳の記述順から、採集場所は、上下方村から市父村の間である。「兎に角変つたイタヤ」*2であると感じた宮部は、馬子にその呼称を尋ねて、野帳の次頁に「クロビイタヤ 弱キ木 枝黒、bark light brown & long. lami narrower」と追記した。

このクロビイタヤは、宮部から同定依頼を受けたロシアの植物分類学者 C.マキシモヴィッチ(C. J. Maximowicz, 1827-1891)が新種であると確認し、宮部に捧げた学名 *Acer miyabei* Maxim. が付されて、1888年8月に発表された。

(4) 世界水準の植物学を目指して

1886年~1889年、宮部は世界屈指の植物腊葉館と図書館を誇るハーバード大学に留学した。A.グレイからは「懇篤な奨励」*1と厚遇を受け、C.マキシモヴィッチからも書簡により千島所産植物109種の標本目録を提供された宮部は、1884年南千島採集標本を土台として博士論文「千島植物誌」を完成させた。1889年欧州経由の帰路、宮部はC.マキシモヴィッチを7月に訪問、9月帰札して母校の教授に着任した。

図4は札幌農学校の植物腊葉室で、ダーウィン(左より2枚目)、マキシモヴィッチ(同4枚目)、グレイ(同5枚目)の肖像額に見守られながら研究に専心する宮部金吾の姿である。



図4 植物腊葉室の宮部金吾教授(1903年)

(注) *1『文武会々報』第55号(1908年12月)、*2『宮部金吾』(宮部金吾博士記念出版刊行会、1953年)。札幌農学校簿書・宮部金吾旧蔵書簡・植物学教室関係資料(当館所蔵)、『札幌博物学会会報』第1巻第1号(1906年6月)、北海道大学総合博物館企画展示図録『マキシモヴィッチ・長之助・宮部』(2010年)等を参照。図1は植物園所蔵写真。

北大歴史ノート 第10話 札幌への道（中編）

札幌農学校が開校した1876年、東京からの第一期入学生は、品川～小樽間は船に、小樽～札幌間は馬に乗り、札幌に到った。

鉄道の整備が進むと、1892年までに上野～青森間の鉄道を使った2つの経路が開かれた。青森以降、船で日本海側の小樽へ渡り小樽～札幌間の列車を使う経路と、船で太平洋側の室蘭へ渡り室蘭～札幌間の列車を使う経路である。

1905年に小樽を経由する函館～札幌間の鉄道が開通し、1908年に青森～函館間の定期航路が開設されると、列車と青函連絡船を乗り継ぐ、往年の北大生になじみの深い経路が完成した。

青函連絡船に乗って（1909年）

1909年の予科入学生のひとりが、校友会誌『文武会々報』に上野から札幌までの道中記を寄せている。記事内容を茶色の文字で摘記する。

9月1日昼頃、上野停車場で青森行きの列車に乗車する。18時頃、福島県白河あたりで日が暮れ、車内に電灯がついた。外套を着こみ、腰の痛みを我慢しつつまどろむ。翌日10時、青森に到着した。

当時の時刻表に照らすと、この列車は1日2便運行していた上野～青森間直通の急行列車とみられる。客車には3等級あり、最も安価の3等車で運賃を計算すると、普通乗車券の4円58銭に加え、急行列車券が50銭かかった。約21時間を要する夜行列車であるが、寝台車はなかった。

9月2日11時過ぎに、小型のはしけぶね船から青函連絡船「比羅夫丸」に乗り込む。乗船してみると、思ったより立派な造りで安心した。3時間ほど眠っているうちに、函館港に着いた。

「比羅夫丸」は、前年の1908年に就航したばかりで、国内で初めて蒸気タービン機関を備えた新造船であった。排水量1,480トン、旅客定員328名、座席は1等～3等があり、最も安い3等の運賃は1円であった。青森～函館間を4時間で結び、「田村丸」と2隻で1日2往復した。

9月2日18時、函館から列車に乗る。車内は満員で、かろうじて腰掛を確保した。翌朝7時に到着した札幌は、低い建物ばかりの、おしつぶされたような平たい町であった。

上野～札幌間の移動は約43時間を要し、運賃は急行列車券の分を含めて約11円であった。

すし詰め急行列車（1956年）

美術部黒百合会OB(さっぽろくろゆり会)の会誌に、上野から急行と青函連絡船を使い札幌に来た1956年入学生の回想が寄せられている。

入学試験は東京の会場で受験したため、初めての渡道である。戦後の混乱の影響が色濃く残る上野駅から、青森行きの急行列車に乗る。特急列車はなく、急行列車の中はすし詰め状態で、青森到着の頃には大いにくたびれた。

上野～青森間の所要時間は、普通列車の乗継で約24時間、急行列車は約14時間であった。普通運賃1,010円（3等に限り5割の学生割引あり）に加え、急行料金が400円かかった。

青森から乗船した青函連絡船は、洞爺丸台風の影響か、小さめの船に見える。船底の部屋で眠り、目が覚めると函館港に着いていた。

1954年9月、洞爺丸を含む青函連絡船5隻が台風15号により沈没・転覆した。その影響の残る1956年当時は、貨物船や他航路の客船の転用等により対応していた。青森～函館間を4時間半で結び、運賃は220円であった。

函館からは小樽経由の蒸気機関車に乗り、札幌に到着する。その足で下宿を決め、市役所の支所で米穀通帳の手続きをすませた。

上野～札幌間の所要時間は約26時間、運賃は学生割引を使うと約1,400円であった。

*

戦前も戦後も、青函連絡船を使った行程は相当な長旅であった。次回は、羽田～千歳間の航空便へのスカイメイト制導入(1967年)により行程が劇的に短くなった様子を取りあげる。

(廣瀬)

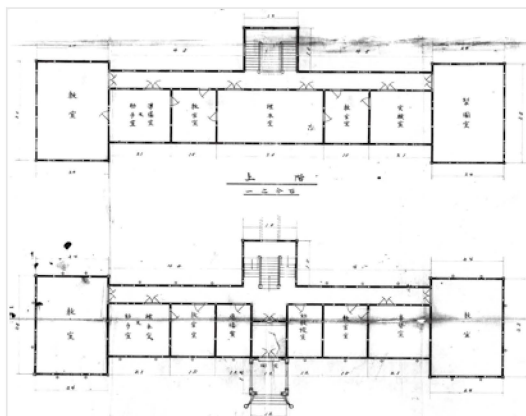
【出典】森の人「初めて札幌へ」（『文武会々報』第59号、1910年3月）、幸治敏興「蝦夷地見聞録 その一」（『さっぽろくろゆり会誌』第39号、2022年5月）

北大風景グラフX 古河講堂



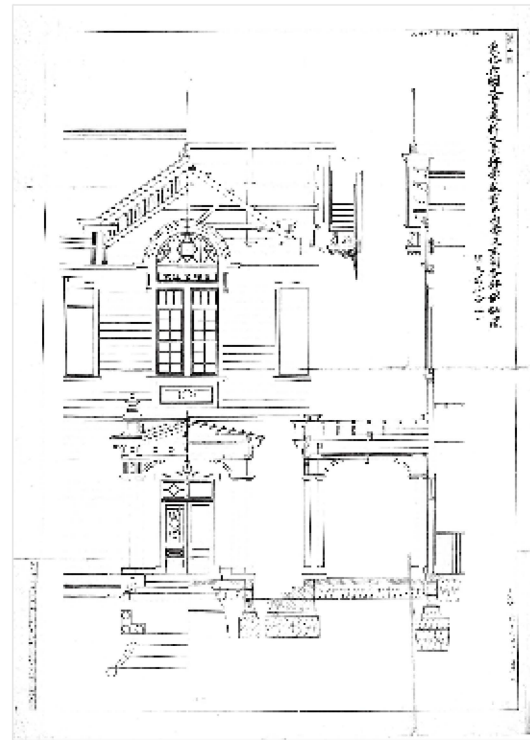
クラーク博士胸像の北に位置する木造2階建の白壁の建物「古河講堂」は、古河家からの寄附により、1909年11月に「林学教室」として竣工した。

正面玄関には、装飾を施した玄関ポーチが設けられた。屋根上には小さな塔を設置しており、直下の庇の下には、半円形の窓と「古河家寄贈」という文字がある。なお、新築時の図面には「古河家建設」と記載されている。



林学教室の2階・1階平面図

林学教室は、林学を専門とする教官、林学科の学生、付設の林学実科の生徒が主に使っていた。1階は、左右突き当たりの教室の間に、標本室及び助手室、教官室、応接室、助教授室、事務室がある。2階は左手突き当たりに教室が、右手突き当たりに製図室があり、間に準備室及び助手室、



新築時の図面(正面妻及び玄関詳細図)

教官室、標本室、実験室があった。林学教室の北側には、標本倉庫(1909年新築)、化学実験室(1909年新築)、林学実習室(1916年新築)、林学貯蔵兼標本室(1922年新築)などが連なっていた。

附属農林専門部(1945年農学・林学実科を改組)が1951年に廃止され、1954年頃に林学科が農学部本館に移転すると、1955年より一般教養部の「本館」として使用された。旧林学教室は事務室や読書室等に、林学実習室は一番教室・二番教室に、化学実験室は三番教室に、林学貯蔵兼標本室は演習室や教官室等に転用された。

1961年～1964年に教養部は北18条に移転となり、北側の建物群は1962年頃より取り壊され、その跡地には5階建の経済学部が建った。古河講堂は、1978年～1980年に大学院環境科学研究科が利用した後、1995年まで一般教養課程担当の教官が、1995年～2019年3月には文学部が使用した。

1997年、古河講堂は国の登録有形文化財となった。1960年代以降緑色だった屋根の色は、1999年に竣工当時の色(灰色を基調に隅が緑色、塔の裾が赤色)に復原された。2023年現在、創基150周年記念事業の一環として、古河講堂の改修や利活用が計画されている。

(佐々木)

【参考】池上重康「古河講堂(旧東北帝国大学農科大学林学教室〈その3〉)」「リテラポプリ」40号、2010年3月

(資料紹介) 収蔵庫さんぽ

坂本直行が描いた春の山

画家の坂本直行（1906－1982）は、北海道庁立札幌第二中学校を卒業後、1924年4月に北海道帝国大学農学部附属農学実科に入学しました。中学時代から登山に親しんでいた坂本は、山岳部に入部し、『北大山岳部々報』に山岳風景のスケッチや扉絵を寄せました。

坂本は農学実科で花卉・園芸学担当の前川徳次郎助教授に師事しました。卒業論文では、大雪山や夕張岳などのサクラソウ属を調査し、59点のスケッチを添えて「北海道産桜草属ニ就イテ」（農学研究院図書室蔵）にまとめました。



ハンノキの扉絵
(坂本直行画)

卒業後の坂本は、同窓の野崎健之助との牧場経営を契機として1930年に十勝広尾村に移り住み、農地も開墾しました。農業に従事するかたわら、山岳部の登山隊への参加をはじめ、主に日高山脈で登山を続ける一方、山や自然を対象としてスケッチを描き続けました。北海道の花々を描いた六花亭の包装紙のデザイン（1961年完成）は、坂本の代表的な作品として現在広く知られています。1965年に坂本は十勝を離れ、札幌にアトリエを構えて画業に専念しました。



第一農場での実習（1924～1926年頃）
前列左3人目が坂本直行



五月のニトヌプリ

大学文書館の収蔵庫には、坂本の作品の一つである水彩画「五月のニトヌプリ」がおさめられています。坂本が十勝から札幌に移り住む準備をしていた、1963年に描かれました。画面左奥にはるかにニセコアンヌプリを望む、雪が残るニセコ連峰が描かれています。寄贈者の真屋幹雄氏によると、後志地方の山を描いた坂本の作品を探し、本作を見つけられたそうです。



春の白井岳

また、山岳部OBの山田眞弓博士（理学部動物学第一講座第2代教授、1923－2018）の旧蔵である水彩画「春の白井岳」を、大学文書館1階の沿革展示室で開催中の企画展示「絵心のある資料たち」で公開しています。定山溪に位置する白井岳の風景を色紙に描いた坂本の作品です。同展示は、2023年7月31日までご覧いただけます。（佐々木）

〔活動紹介〕 日誌 pick up

W.S.クラーク博士の資料見学会を開催

1月9日(月)、W.S.クラーク博士(1826-1886)を高祖父に、英文学者のW.S.クラーク二世(1900-1969)を祖父にもたれるBradford H. Sewell氏とご家族が来学され、大学文書館にて資料見学会を開催しました。

見学会では、W.S.クラーク肖像画、1875年刊行の聖書、W.S.クラークによる講義「植物生理学」の受講ノートや、W.S.クラーク二世にまつわる資料等を陳列しました。

W.S.クラーク二世は、1956年9月15日開催の創基80周年記念式典に来賓として来札されました。式典のアルバムには、クラーク博士胸像前、クラーク会館定礎式、学長室等、大学構内で撮影した写真が貼付されています。

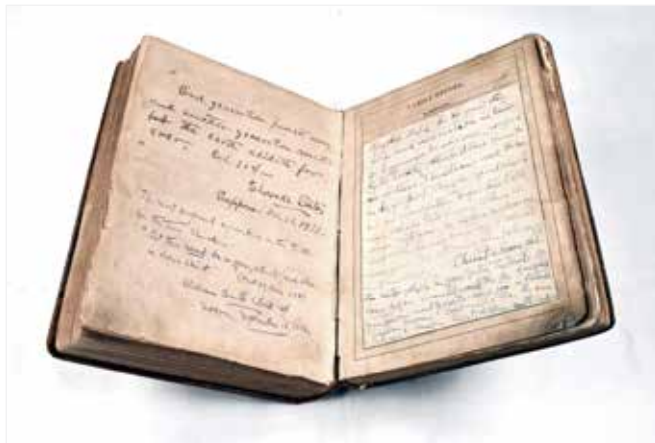
陳列した聖書は、W.S.クラークが佐藤昌介(札幌農学校第1期生)に贈ったものです。1921年12月22日に佐藤昌介は、「One generation passeth away, and another generation cometh; but the earth abideth for ever. Eccl 1:4」〔世は去り、世はきたる。しかし地は永遠に変わらない。「伝道の書」1章4節〕と書き込みを残しました。W.S.クラーク二世は、1956年9月17日、その下に青字で書き込みをしています。(廣瀬)



W.S.クラーク肖像画
(テンペラ画)



W.S.クラーク二世夫妻と杉野目晴貞学長
(1956年9月)



W.S.クラークが佐藤昌介に贈った聖書



Bradford H. Sewell氏(右2人目)とご家族

編集室日誌

2022年11月8日開催の北海道大学150年史編集室会議(会場:大学文書館1階会議室)において、室員として近藤健一郎教授(教育学研究院)、岡田真弓准教授(アイヌ共生推進本部)に参画いただくこと、書名を『北海道大学百五十年史』とすること、構成を通説編2巻・資料編4巻とすること等について了承を得ました。2023年4月7日には、新たに室員として江田真毅教授(総合博物館)、高倉純助教(埋蔵文化財調査センター)に参画いただくこととなりました。

現在、編集室では東北帝国大学農科大学期(1907年~1918年)と北海道帝国大学期(1918年~1947年)を主な対象とする「資料編1」の編集作業が継続中です。

資料の収集・保存にご協力を

探しています

大学祭のプログラム



大学祭のプログラム

上段左より2013年6月、1998年6月、1986年6月
下段左より1978年6月、1969年6月、1948年10月

「大学祭」は、1946年10月17日～27日に、学内の親睦と学外との交流を目的として初めて開催されました。

1948年10月8日～17日開催の大学祭は「クラーク先生胸像再建記念」と題し、1943年に金属供出にあった胸像の再建除幕式を初日に挙行了しました。

1960年まで「大学祭」や「文化祭」とされていた呼称は、1961年以降「北大祭」に統一されています。開催時期は1959年を除いて9月～11月でしたが、1964年より主に6月開催となりました。

大学祭のプログラムからは、学部公開・サークル発表・出店・仮装行列といった催事の内容とその変遷、表紙デザインに込められた北大のイメージや時代の雰囲気をつかぎ知ることができます。

編集後記

本号では、自然・美術・歴史を題材としました。築114年の古河講堂は、表紙と風景グラフでご紹介しています。なお、本誌の発行は、150年史編集作業の本格化に伴い、年2回より年1回に変更となります。

表紙図版——古河講堂

- ・林学教室前に憩う生徒たち 1936～1938年頃
(林学実科1939年卒業アルバムより)
- ・一般教養部本館 1950年代
(「北海道大学所属国有財産沿革」掲載写真)
- ・新築当時の姿に復原された古河講堂 2014年6月
(大学文書館撮影)

北海道大学150年史編集ニュース 第10号

発行日 : 2023年5月20日

編集・発行: 北海道大学150年史編集室

〒060-0808

札幌市北区北8条西8丁目

北海道大学大学文書館内

開室日 : 平日(月～金) 9:30～16:30

(祝日、年末年始12/29～1/3を除く)

TEL/FAX : 011-706-2395

E-mail : hu150@archives.hokudai.ac.jp

URL : <https://www.hokudai.ac.jp/bunsho/hu150.html>

